
8月8日

間宮彰人

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

8月8日

【Nコード】

N4167A

【作者名】

間宮彰人

【あらすじ】

とある田舎の町に住む深津知則^{ふかつともり}は高校3年、夏休みに初恋の人のことを急に思い出したが…

第0話：プロローグ

8月8日、

夏真つ只中の暑い夜、

月はまだ半月で、それほど明るくはなかったけど、人の輪の真ん中にある火のおかげであたりは随分明るかった。

独り、

手すりに肘をかけて

その火を見ていた。

いつまでも、

いつまでも…

第1話：ポストの中身

「あちい…」

夏だから暑い、当たり前だ。

しかし当たり前とわかっていても割りきれないことのほうが多い。

セミの声も手伝ってか、余計暑く感じる。

ことなくそ暑くちゃ集中できない。

…なんて言い訳してみる。実は勉強したくないだけだ

部屋からでて、リビングへの扉を開けると、ひんやりした空気が俺を包んだ。

「俺は扇風機でお勉強、あんたはエアコンでテレビですか」ソファにぐったり寝転がっている母に向かい俺は皮肉った。

「別にいいでしょ。あ、ポスト見てきて」

このクソババア…！ きつとお前は地獄行きだ…

渋々ながら外へ出る。

うへえ…これはきつい、なんという暑さだ。

さつさとポスト見て家に入ろう。

ポストの中には手紙が2〜3枚、よれよれのシールが貼られた広告にあと一枚、シンプルな紙が一枚。

「納涼盆踊り大会…」

うう、陽光が当たってジリジリと暑い。俺はさつさと家の中に入った。

手紙を適当にテーブルに投げると、すぐに部屋に向かった。

実は言う俺の部屋にもエアコンはある。使うと変な疲れがたまから嫌いなんだ。

勉強机に座り、問題集と向かい合う。だけどどうにも集中できない。暑さのせいもあるだろう。しかしそれ以上に、俺はさっきの紙が気になっていた。

盆踊り…そう言えば昔盆踊りの時に会っていた女の子がいた。笑う

と可愛くって、無邪気で、天然で、俺の…初恋の人…。
気になりだすと考えって止まらないモノだ。俺はシャーペンを問題
集に投げ出すと昔を思い出しはじめた。

第2話：出会い

別に、特別なことなんてあの娘との間には起きなかった。

親の付き合いで出会って、仲良くなって、いつの間にか好きになっていた。ただそれだけ。

その感情に気づいたのはもっと後のことだったけど。

まだ俺が、自分のことを僕と呼んでいた…あの頃

はじまりは幼稚園を卒園したばかりの、3月の下旬のことだった…

車の中、流れる景色に目を向けていた。

「ねえ、これからどこに行くの？」

景色から目を反らさずに僕は聞いた。

「いいところ」

お母さんもまた前から目を反らさずに言った。

またこれだ…

実はこの質問はこれで3回目、多分いくら聞いても別の答えはかえってこない。

それから30分くらい、僕らはある大きな建物の前に着いた。
白を基調とした大きな建物、ホテルだ。

チェックインを済ませると、

部屋には行かずロビーで立っていた。

「なんで部屋行かないの？ もう疲れてきたんだけど…」

「もう少ししたらね」

…多分さっきと同じ。

だから僕は何も聞かないで待つことにした。

それから少しすると、

「おい、奈津子」

とお母さんの名前を呼ぶ声。

振り向いて見ると大きめのバッグを抱えた女の人と三人の女の子。
この人たちを待っていたみたいだ。

「待たせてごめんねっ！」

女の人：女の子の母親だろう、その人は顔の前で両手を合わせて言
った。

「いいいいいよ。じゃあ紹介するね、これが息子の知則、今日明日
よろしくしてやってね」

お母さんに促され僕はお辞儀をして小さく、

「よろしく願います」

と言った。すると

「よろしく願います」

と四者四様というか、バラバラに四人が返してきた。

「じゃあこつちも紹介するね。右から小学2年の、今年小学生
になる佳那子、幼稚園の年中の、今日明日よろしくね」

女の子三人は、それから一呼吸おいてはつきり、明るく言った。

「願います！」

その明るい声に触発されて、僕もさっきより大きく明るく、

「願います！」

と返していた。

これが僕と佳那子ちゃん、

かなちゃんとのちよっ変わった出会いだった…

閉じていた目を開いて、意識を現在に戻す。

もう十年くらい前のことが、断片的にだが鮮明に頭に残っている。

かなちゃんの名前しか思い出せないのは、それだけ俺が彼女の事だ
けをずっと意識していたからだろう。

年が同じだったこともあり、俺たちは直ぐに仲良くなったけど、住む場所が少し遠いこともあり、小学校に上がってから、会うことはほとんどなかった。

必ず会うことになっていたあの日以外は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4167a/>

8月8日

2010年10月17日07時39分発行